

神人あいよかけよの生活運動

願

御取次を願ひ頂き

神のおかげにめざめ

お礼と喜びの生活をすすめ

神心となつて人を祈り助け導き

神人の道を現そう



KONKOKYO
金光教

「神人の道」を一人ひとりの生活に



神人あいよかけよの
生活運動パンフレットⅡ

KONKOKYO

金光教祖三十二年大祭紀念地全景

歴代金光様の御取次を頂いて

おんとりつぎ

— お礼と喜びの生活をすすめる —

目次

教祖様に始まる御取次の道

1

二代金光四神様の御取次

7

三代金光様の御取次

15

四代金光様の御取次

23

「神人の道」を現代に

33

教祖様に始まる御取次の道



「かみひと神人あいよかけよの生活運動」は、立教百五十年（平成二十一年）のお年柄に教主金光様（金光平輝へいき様）がお示しくくださった「神人の道」とのおぼしめしを頂き、それぞれの生活の中で、信心の稽古を積み重ね、神様のおかげの中に生かされている実感を深め、お礼と喜びの心をもって周囲の人々と共に生きていくことを願いとします。

このお道を開かれた教祖様は、そのご生涯の中で、ご家族を次々に亡くされるなど、さまざまな苦難に出遭われました。そして、ご自身も重い病を患われる中で、人間を救い助けたいと願い続けておられる神様に会い、やがて病は快方に向かいました。

以来、教祖様は常に神様の御心みこころに添った生活を求められ、神様の働きに包まれて生きる喜びを深められて、次第に神様の御心をわが心に頂かれるようになり、「難儀な氏子を取次ぎ助けてやってくれ」との神様のお頼みのままに、世の苦しむ人々を救い助ける働きを現されました。

ご生涯をとおして「神も助かり、氏子も立ち行く」という「神人の道」を歩まれた教祖様は、「私がおかげの受けはじめてあります。あなた方もそのとおりにおかげが受けられます」と仰せになり、生

神金光大神取次をもって、後の者が迷わぬように、誰もが神様のおかけを受けられる道をお示しく下さいました。

問題を抱えて参ってきた人々には、「神様へ一心にご信心なされませ。おかげはあります」と諭されながら、起こってくる問題のみに心をとらわれるのではなく、「わが心が神に向かう」ことの大切さをお説きになりました。

そして、神様からおかげを頂いた者が忘れてはならない心得として、「おかげを受けるのに巧者がある。だれでもおかげをいただいたら、そのありがたいということをいつまでも忘れないようにせ

よ。それを忘れたら、もういけない。後のおかげはいただけません。それさえ忘れなければ、おかげは思うようにいただける」とも諭され、お礼と喜びの心から神様のおかけが生まれてくることを教えてくださいました。

それは、わが身に起こる問題が解決することのみを求めるのではなく、日々の生活の中で、神様のお働きを感じ、その御心に気づかせていただいて、「ありがたい」という心をいつまでも育み続けていくことが、信心の要点であるとおっしゃっているのです。

ここから生神金光大神取次の業ぎょうを具現ぎげんしてこられた歴代金光様のお取次の内容を頂いてまいります。

二代金光四神様の御取次



教祖様が明治十六年にお隠れになり、そのみ後を金光四神様（金光宅吉様）がお受けになりました。

四神様がお取次くださるようになって間もない頃、当時、沙美（現岡山県倉敷市玉島黒崎）に住んでいた原田ミツ師（後の小倉教会初代・桂松平師夫人）は、幼い頃からひどい冷え症で苦しんでいました。何とか人並みの体になりたいと思い、四キロほど北のご霊地に、雨が降っても、風が吹いても、病気が治りたい一心でお参りを続けていました。

地元の人からは、「おミツさんのような信心家はあるまい」と言われるほどでした。しかし、病気はいつこうによくならず、次第に心が揺らぐようになりました。

ある日、四神様に、「私はこれほどに信心いたしておりますのに、病気はいつこうによくなりません。どういうことでございましょうか」と尋ねました。

四神様は、「そうかなあ、信心ができていますかなあ。私がおかげを授けるのならすぐにでもあげるが、神様からおかげを頂くのである。神様からおかげを頂ける信心をせねばならんなあ」とおっしゃいます。ミツ師からすれば、「これほど信心しているのに」と、

思わず涙があふれてくるのです。

そこで、「金光様、神様からおかげを頂ける信心とは、どういう信心でございましょうか」と重ねて尋ねました。すると、

「そうじゃ、信心はなんぼう通りもある。参るのは『参り信心』、頼むのは『頼み信心』、拜むのは『拜み信心』と言うてなあ。まあ、その中でも、『参り信心』が取りどころじゃ。数多く参っておるうちに、ああいう信心をすればああいうおかげ、こういう信心にはこういうおかげと、神様からおかげの頂ける信心が、おいおい分かってくるようになる。まあ、いっばし（できるだけ）、参るのじゃ

なあ」とみ教えくださいました。

ミツ師は、このお言葉を深く心にとめて帰り、両親や当時沙美でお取次に従われていた原田タニ先生にも、四神様のみ教えを話しました。原田先生は、「金光様が、いっばし参るのじゃと仰せになったからは、いっばし参らせていただきなさい。金光様は、あなたのごことはよくご存じだから、これからは足が痛いので、どこが悪いのと言わずに、『金光様、今日もお参りさせていただきましてありがとうございます』と、参拝できたお礼を申し上げるだけにしなさい」と教えられました。この言葉に勇気づけられ、ミツ師はご霊地に参

拝を続けていました。

そんなある日のこと、ミツ師は急に目が見えにくくなり、不自由しながらお参りをすると、こちらが何も申し上げないのに、四神様はすっと立ってご神前に進まれ、

「生神金光大神様、天地金乃神様、お届け申し上げます。ここに参拝の黒崎村沙美、原田林次郎りんじろうの娘ミツ、毎々まいまい広大なるお恵みをこうむりましてありがたく御礼申し上げます。当人、体内の血のめぐり悪く、まことに難渋いたしております。本日はまた、眼の痛みで参っております。本人はもとより家内一同の者、一心の信心が引き立

ちますならば、何とぞ一日も早く安心のおかげをお授けくださいませ」とご祈念をされました。

このお言葉を聞いたミツ師は、心の眼が開けた思いがしました。それまでは神様にお礼を申し上げながら、それが形だけだったことに気がついたからです。それからは心からお礼とお詫わびができるようになります、次第に四神様の一言一言が身に染みてくるようになります。こうして日が経つにつれ、病気もだんだんよくなっていったのです。

* * *

このお話は、四神様がミツ師になり代わって、神様に日々のお礼

を申し上げのお姿が印象的です。四神様が神様にお届けくださったお言葉を頂く中で、病にとらわれていたわが心の正体に気づいたミツ師は、次第に神様からおかげを頂ける心に整えられ、やがて病気が快方に向かいます。

お礼の心に神様のおかげが生まれてくるというこのお話は、教祖様の「不自由を行と思ひ、物を不足に思わず、物を苦にせず、万事、神様を一心に頼み、万物をありがたくいただくという心を磨いておると、早くおかげが受けられるのである」というみ教えに通じるものです。

三代金光様の御取次



金光四神様は十年のお結界奉仕をお勤めになりました。お隠れになる二日前、ご家族に次のようなご遺言を残されています。

「われは六歳のとき死ぬるを、親様の一心願より、助けていただいたは神様のおかげならこそ……どうぞせったね攝胤をつこうてください。万事言い付けてください。攝胤もあれくらいになったら、お広前の用使いはします」

金光攝胤様はそのご遺言どおり、十四歳で本部広前のお結界にお座りになられ、七十年もの長きにわたり、お取次のご用をお勤めくださいました。

三代金光様がお広前のご用を始められた当時のことを、叔母の藤井くら様は、「お参りの人がない時に、お座りになっているところから立って、お広前の南側の窓際のところまで行き、外の広場で遊んでいる友達の様子を、じっと見ておられることもあった。本当に、いじらしい気がしていました」とお話になっています。

また、三代金光様ご神勤当初のことと思われませんが、ある先生が、「教祖様、四神様はよくみ教えをくだされましたが、あなた様はいっこうにお話をしてくださいませんか」と尋ねられたのに対して、三代金光様は、「教祖様、四神様はみ教えをされましたから、私は

それを実行させていただきます」とお応えになったとのことでした。

三代金光様は、戦前、戦中、戦後という厳しい時代の中にあっても、天地のお働きのように変わることのないお結界奉仕のお姿と、すべてを見通しておられるごときそのお言葉に、いつしか全教から「生神様」と称されるようになりました。

* * *

昭和九年、三代金光様がお取次をくださって四十年を迎えました。その節に、三代金光様にお礼を申し上げたいという動きが起り、「ご神勤四十年御礼の会」が発足しました。この話を聞かれた三代

金光様は、「御礼の会のことは、ことわってもらいましょう。年限が長いというだけで、功がないのですから。みんなが神様へお礼を申してくださいれば、それで結構です」とおっしゃったのです。

また、昭和十年の秋のご大祭に、三代金光様は初めて祭主としてお立ちになり、そのお直会なおらいが開かれました。中央に三代金光様がお座りになり、その隣に教監の高橋正雄師まさおが着かれました。高橋師が、「まことに、このたびのご大祭は、おかげさまでありがたいお祭りを頂きまして、ありがとうございます」と、金光様にお礼を申し上げたところ、「はい、ありがたいことでしたなあ」とおっしゃいました。

高橋師は、その瞬間、「金光様、あなたに私はお礼を申し上げておるのでございますが」と言いたい思いになられたそうです。しかし、「金光様はお礼をお受けにならぬ。『ありがたいことでございますましたなあ』と、すうっと神様へ持って行ってしまわれる。これがお道ですなあ」と、高橋師は後々まで語っておられます。

さらに昭和十一年、三代金光様はご自身の歩みを振り返られながら、次のようにお諭しになっています。

「天地のことは人の力におよびませんでなあ。神信心には、何事も辛抱することが一番大切でございます。教祖様がなあ、欲をはないて、

神様のお取次をお受けなされ、四神様が、お後を十年、夜に日に欲をはなれてお座りなされ、早うお国替えなされてなあ。それから、何も知らぬ私が座りさえすれば楽じゃいうて、座らしてもらいました。

はじめのうちは、つろうてつろうて、よう泣きましたがあ。親様の教えを守らしてもろうて、泣く泣く辛抱しいしいに座ったりましたら、欲しい物も、考えることも、いつの間にか無くなりましたなあ。ありがとうてありがとうてならぬようになり、なんぼうお礼を申しても足りませんのじゃ。お礼の足りませぬお詫びばかりしておりますが、もったいないことであります」

このように仰せられた三代金光様は、その後、ご神勤六十年を迎えられて、「真剣に御取次を頂き、ご用のおかげを頂く」とのお言葉をお示しになりました。このお言葉は、教祖様、四神様のみ教えをひたすらに、純真に、守り続けられ、お取次のご用をとおして、あまたの人々を救い助けられたご自身の歩みを、そのままに表現されたものと頂きます。三代金光様はお言葉のままに、天地につながる無限の心の働きを具現され、「あなた方もそのとおりおかげが受けられます」と教祖様が仰せられる生神の境地へとご進展になられたのです。

四代金光様の御取次



昭和三十八年、長きにわたりご神勤くださった三代金光様がお隠れになり、そのみ後を金光鑑かがみ太郎様がお受けくださいました。

「目閉ぢれば父のうしろに従ひて境内歩むわが姿見ゆ」

「父とともにわがある今日も夕づきぬ父が通ひし道ふみもどる」

このお歌は、四代金光様が三代金光様への敬慕の思いを込めてお詠みになったものです。そのように、四代金光様は絶えず三代金光様と共にあられ、ご神勤をお進めくださったのです。

ある女性が体に不調を覚え、悩みながら四代金光様にお取次を願われました。

医師に診てもらったところ、すいぞう脾臓が弱っているとのことで、治療するうちに、こうげん膠原病も患っていると診断され、多量の薬の服用が始まりました。しかし、その副作用がきつく、我慢して薬を飲み続け、病気の進行を遅らせるか、薬をやめて進行もやむなしとするか、迫られることになりました。

そのような内容のお届けに、四代金光様は、
「病気のとりこになりなさんなよ。とりこになったら、不足に思うたり、恨んだりするようになる」

そして、「何事もお詫びをしてお礼を言うんではなくて、お礼を

言うてお詫びをする。順序を間違えてはいかん。お風呂に入る時でもお礼を言うて入り、疲れを取らせていただくような入り方をし、出る時には、ありがとうございます、というような気持ちをし、しっかり持たせてもらおうように」とみ教えくださいました。

帰りの車中、その女性は小躍りしたくなるような、たいへんな元気を頂いた気がして、このみ教えを一生の宝として頂き、薬をやめようと決心したのです。

それからは、何事にもお礼を申す稽古に努め、「神様、ありがとうございます」と言う自分の声で目覚めることもありました。一度

でも多く、心からお礼を申せる自分にならせていただきたいと願いつづける中で、薬の服用を中止した不安も、病気の重さも、症状も、それほど気にならなくなり、ようやくとりこから解放されたのです。

その女性は、『とりこになるな』というお言葉は、何事にも言えることではないかと思えます。とりこになっている間は、その他のことが何も見えなくなり、自分を小さくしてしまい、ついには病気や問題を恨み、自分や人を責めたりします。私は病気になったことで、どれほどの神様のお働き、お恵み、お育てを頂いたことでしょうか。

今では、病気を神様からのお差し向けとして拝むことができ、金光

様のみ教えを私の信心の原点として、道のため、人が助かるための
ご用にお使いただける自分にならせていただきたく念じており
ます」と語っています。

* * *

お礼を土台とした信心の大切さについて、四代金光様は次のよう
にご理解くださっています。

「難儀が助かりたいとお願い申すのでございますが、難儀を土台に
して、困ったことを土台にして、お願いするのではなくして、教祖
様がお道をお開きになり、そのご縁につながらせていただいて、今

日までお世話になっておかげを頂いているから、難儀なことをお願
いすることができ、そこを土台にしてのお願いなのであります。

助からせて頂きたい、お役に立たせて頂きたい、神様にお使い頂
きたい、どうぞおかげを頂きたいと一所懸命におすがりし、お願い
するのでありますが、ただ今申すようなあたりまえな順序に従っ
て、お礼を申し上げて、しっかりしたお礼を土台にして、お願いな
りお礼なりを申し上げることが大切だと自戒しております。

おかげの中で難儀をしておるから助かるのであります。難儀の中
におるのであったら、どこへいっても難儀であって、どうすること

もできんのでありましょうが、天地の限りなき恵み、教祖様のおかげ、そういう中でいろいろなことが起っているのです。お互い、性別・年齢それぞれ違いますが、みな親の子としてこの世に生をうけ、生まれた時からお世話になって、そして今日があるのであります」

「お礼を土台に」「お礼が先じゃ」と繰り返しご理解くださった四代金光様は、先祖や両親がおり、教祖様のご縁につながらなければ、今の自分がないという真実を、「あたりまえのことではない」と諭されながら、常にいのちのもと、生活のもと、自身の手元を大切に

する生き方をお示しく下さいました。そこには、私たち一人ひとりがすでに神様のおかげの中に包まれていること、私たちのいのちが、わが計らいを超えた大きな流れと働きの中にあることを忘れてはならないと、四代金光様ご自身が自戒されながら、求め続け、現し続けられたお姿があります。

「神人の道」を現代に



ここまで歴代金光様のお取次の一端を頂いてきました。それぞれの時代にあって、今に語り継がれ、人が助かりへと導かれる尊い生き方を現してくださいましたが、そのあられ方に貫かれるものは、教祖様のみ教えを守り続けられ、親様を頂くあり方を求められ、生涯かけて「神人あいよかけよ」の信心を現し続けてこられたお姿と頂きます。その中で、今日に生神金光大神取次の業を具現されている教主金光様は、「神人の道」というお言葉をお示しく下さいました。

教主金光様は、『神人の道』とは、どういうことでありましようか」とお取次を願った信奉者に、「世話になるすべてにお礼を言うことです」とご理解されました。それは、四代金光様の御心をご自身に頂かれてのお言葉であり、今日を生きる私たちに、「ありがたい」という思いが生活の中にあふれていますか」と問い掛けてくださってもいるのです。

私たちの「ありがたい」という心に神様がお生まれになります。おかげの中に包まれている実感を深めて、「神人の道」が一人ひとりの生活に現れてくるおかげをこうむらせていただきたく存じます。

編集／発行 ■ 金光教本部教庁

〒719-0111 岡山県浅口市金光町大谷320

TEL 0865-42-3111 FAX 0865-42-4419

E-mail w-master@konkokyo.or.jp

URL <http://www.konkokyo.or.jp/>